

# もうひとつの人類史

——歴史の詩的転回——

## ①

## 0. 歴史とはなにか

歴史は事実か虚構か？（歴史的事実と歴史家の物語）

Cf. 実証主義と言語論的転回

歴史の対象（客観）と歴史を読み解く者（主観）の対立／対話

## 1. 近代歴史学の誕生

### 1-1. 戦士たちの歴史

ヘーゲルは「最初の人間」を、他人におのれを認めさせたいという「承認 *Anerkennung*」欲求にあふれた二人の戦士として描く。そしてたがいにたがいを認めさせようとする死闘 *Kampf auf Leben und Tod* が、歴史を進ませると考える。

（主人と奴隷の弁証法）

Cf. ランケの実証主義（史料批判）……科学としての人文社会学の形成 ①

たとえばリウィウスのローマ史は、歴史とは言い難い伝承や神話に塗れていて、本当のことを半分も語っていない。歴史家と歴史の資料との戦い。

Cf. マルクスの階級闘争史観……科学としての人文社会学の形成 ②

歴史の因果律を経済によって読み解く。資本家と労働者との戦い。

### 1-2. 歴史の終わり＝目的（自由を求める闘争）

カント：完全に自由な社会を実現すること。

ヘーゲル：国家精神の実現、絶対知への到達。

マルクス：共産主義社会の実現。

Cf. アレクサンドル・コジエーヴ、フランシス・フクヤマ

冷戦の終結＝社会主義に対する自由主義の勝利＝闘争の喪失＝歴史の終焉。「リベラルな民主主義」だけが、「全人類をあまねく承認する」。→モダンからポストモダンへ

→ 近代歴史学とは、科学の歴史だが、戦い（戦争）の歴史でもある。

## 2. 記憶力、想像力、忘却

### 2-1. 詩人たちの歴史

記憶力と想像力と忘却（力）は、どのようなもので、またどのような関係にあるだろうか？

◇ ジャンバッティスタ・ヴィーコ（1668-1774）

認識することと、創造することとは、たがいに置換可能である。（『イタリア人の太古の知恵』）

真理とは作られたもののことにほかならない。（同前）

最初の人間たちは、自然本性からして、ありのままに偽るところのまったく子供と同様、このうえなく単純素朴であった。そのため、最初の物語は虚偽をなにひとつ作りあげることができなかった。ひいては、必然的に…、真実をありのまま偽らずに語ったものであった…。（『新しい学』）

最初の人民たちはどこでもおのずと詩人たちであった。（同前）

詩の創作者は最初の人民たち自身であったのであって、最初の人民たちはすべて神学詩人たちからなっていたことが見いだされるのである。（同前）

→ 神話（虚構）と歴史（事実）の混淆

Cf. ニーチェ「道徳外の意味における真理と虚偽について」……「真理とは、退屈なものだ！」

一つの神経刺激が先ず形象に移される。これが第一の隠喩である！ その形象が再び音において模写される。これが第二の隠喩である！ そしてそのたびごとに、全く別様の新しい領域の真つ只中に向かって、領域の完全な飛び越しが行われる。…樹々や色、雪や花について語るとき、そうした事物そのものについて何か知っているように思い込んでいるが、しかし実際には、根源の本質には全然一致していない事物のメタファー以外には何も所有していない…。真理とは隠喩、換喩、擬人視などの動的な一群であり、要するに人間の諸関係の総体であって、それが詩的、修辭的に高揚され、転用され、飾られ、永い使用の後に、ある民族にとって確固たる、規範をなす、拘束力があると思われるようになったものであり、錯覚であることを忘却されてしまった錯覚、使い古され具体的には無力になってしまった隠喩である…。

## 2-2. 神話＝想像力と歴史＝記憶力（そして忘却）の混淆

九人のムーサたち。学芸を司るアポロンに統括される姉妹神。記憶力＝想像力。

カリオペ（叙事詩）／クレイオ（歴史）／エウテルペ（叙情詩）／タレイア（喜劇）／メルポメネ（悲劇）／テルプシコラ（舞踏）／エラト（恋愛詩）／ポリュムニア（讃歌）／ウラニア（天文）

ヘリコン山のムーサたちの讃歌から謳いはじめよう …彼女たちなのだ このわたしヘシオドス／以前聖いヘリコン山の麓で 羊らの世話をしていた このわたしに 麗しい歌を教えたもうたのは。／まずはじめに このわたしに語りたもうたのだ つぎの言葉を／神楯もつゼウスの娘 オリュンポスのムーサたちは。／「野山に暮らす羊飼いたちよ 卑しく哀れなものたちよ 喰いの腹しかもため者らよ／私たちは たくさんの真実に似た虚偽を話すことができます けれども 私たちは その気になれば 真実を宣べることもできるのです。（ヘシオドス『神統記』）

### 人間の五つの種族

① 黄金の種族 ② 銀の種族 ③ 青銅の種族 ④ 半神の種族（英雄時代） ⑤ 鉄の種族（ヘシオドス『仕事と日々』）、

### 歴史における三つの時代

① 神々の時代 ② 英雄の時代 ③ 人間の時代へ（ヘロドトスの伝えるエジプト人の三区分）。

「巧みに手際よく話すから、よく胸に納めておけ、神々も人間も、その起りは一つであったという物語じゃ」

人間の種族にまつわる三種類の文学。後者に至るにつれ、事実と虚構とが分割され、事実性が重視されるようにみえる。

- ① 神々の文学である神話……沈黙で描かれた言葉。
- ② 英雄（半神）の文学である物語……象徴的な言葉（詩）で描かれる。

③ 人間の文学である歴史……俗語（散文）で描かれる。

- 虚構と事実は明確に区別されていない。神々と人間が共存する時代、今日虚構とみなされる仮象は、一種の事実を構成している。神々から人間の時代の下につれ、次第に差異は明確になる。
- 事実か虚構か、ではなく、沈黙・象徴・具体という、抽象から具体に到る、性質の異なる三つのタイプの事実を考えるべき。

ホメロス、ヘシオドス、ヘロドトスは英雄時代の最後の人物といわれる（ヴィーコ、98）。その裂け目から、歴史叙述が生まれる。（「ホメロスの詩は古代ギリシア人の習俗を記した国家史である」同 156）

- 神（虚構・精神）の世界と人間（事実・現象）の世界をつなぐ蝶番としての、ホメロス。

---

## 世界歴年表

（ヴィーコ『新しい学』による）

- 1年 天地創造（BC4000）
- 1656年 世界大洪水
- 1756年 ゾロアスター、またはカルデア人の王国
- 1856年 ニムロド、または言語の混乱／エジプト王朝／ヤフェト（巨人）、巨人族の一人、プロメテウスが太陽から火を盗む。デウカリオン。
- 1900年 アブラハムの招命／大ヘルメス・トリスメギストス、すなわちエジプトの神々の時代。／ギリシアでは黄金時代、すなわちギリシアの神々の時代。
- 2082年 ヘレン。デウカリオンの息子でプロメテウスの孫でヤフェトの曾孫。このヘレンの三人の息子をつうじてギリシアに三つの方言が広まる。
- 2200年 エジプトのキュクロプスがアッティカに十二の植民地を拓き、それらでもってやがてテセウスがアテナイを作り上げる。
- 2448年 フェニキアのカドモスがボイオティアにテーバイを建設し、ギリシアに通俗文字を導入。
- 2491年 神がモーセに成文法をあたえる。／サトゥルヌス、すなわちラティウム神々の時代。
- 2553年 小ヘルメス・トリスメギストス、すなわちエジプトの英雄時代。
- 2682年 ヘラクレイダイがギリシア全土に拡がって英雄たちの時代を形成。ローマでは原住民。
- 2740年 デイドがテュロスからカルタゴ建設におもむく。（フェニキア人）
- 2752年 テュロスが航海及び植民により有名になる。／クレタ王ミノス、諸民族の最初の立法者にしてエーゲ海最初の海賊。
- 2770年 オルベウス、そしてこの人物とともに神学詩人たちの時代。ヘラクレス。この人物とともに英雄時代の頂点。
- 2800年 サンクニアテスが通俗文字で歴史を書く。（フェニキア）／テセウス、アテナイを創設し、アレイオパゴスを制定。／ヘラクレス、ラツィオにおもむく、すなわちイタリアの英雄時代。
- 2820年 トロイア戦争
- 2830年 オデュッセウスとアイネアスの遍歴
- 2909年 サウル王の治世（ヘブライ人）
- 2949年 アジア、シチリア、イタリアにおけるギリシア植民。
- 3120年 リュクルゴス、ラケダイモン人に法をあたえる。
- 3223年 オリュンピア競技がヘラクレスによって開設され、その後中断していたが、イシピロスによって再開される。
- 3246年 ローマ創建。
- 3290年 ホメロス（ギリシア）／ヌマ王（ローマ）

- 3406年 ギリシアの七賢人。その一人ソロンはアテナイに人民的自由の体制を制定し、他の一人ミレトスのタレスは自然学によって哲学に始まりをあたえる。(日本建国はこの頃。)
- 3468年 キュロス王、ペルシア人とともにアッシリアに君臨(カルデア人) / ピュラゴラス(ギリシア人) / セルウィウス・トゥリウス(ローマ人)
- 3499年 暴君タルクィニウスの一族、ローマから追放。
- 3500年 ヘシオドス、ヘロドトス、ヒポクラテス。
- 3530年 ペロポネソス戦争。トゥキュディデス。
- 3553年 ソクラテスの道徳哲学。プラトンの形而上学。
- 3660年 アレクサンドロス大王、ペルシア王朝を征服。